―探求・川はちなんだ万葉集の歌―

万葉の川心 第25回

川崎市立木月小学校教諭　船田　園子

物に寄せて思を陳べたる歌（巻第十二　三〇一一番歌）

吾妹子に衣春日の宜寸川

縁もあらぬか妹が目を見む

ふと思い出して、古いアルバムをひっぱり出した。丸々とした赤ちゃん時代からもう一度時を進める。お気に入りの三輪車、きっちりと編んだ長い髪、いつも一緒のぬいぐるみ、そして、母の作ったワンピース。木登り好きなやんちゃ娘が育っていくなか、たった一枚、しとやかで晴れがましい立ち姿があった――「七五三」。母の姿見の中、いつもと全く異なる自分が映っている。着物を羽織れば花と蝶が全身に舞い、帯を締めれば気持ちが締まる。髪を上げると大人になる。慣れないくせにただうれしくて、初めてきた着物の感触は今も体が覚えている。

「戦時中は食べ物がなくて、着物を包んで矢切の渡しを越えたのだ」と母が言う。今は手元にないけれど、忘れられない思い出が衣に詰まっていく。万葉のこの時代もそうであろう。好きな人が髪に触れただけで、その人の魂が髪に宿ると言われたのだ。まして、身にまとう衣なら移香もぬくもりも感じられる。恋人同志が衣を交換するという風習がこの歌に詠まれている。男が女の元に通うのが通常であった。朝が来れば離れていくこの人は次にいつ来てくれるのだろうか。不安は尽きない。せめてあの方の衣に包まり、常に抱かれていたいと思う心が伝わってくる。全身で恋をした時代、袖を振るのも恋人達の動作であった。「袖布留に表現する着物の名称である。また、「衣取替川（鳥飼川）」というのもある。このように、巻の十二は川の名前に言葉をかけて読んだ歌があり、感動を呼ぶというよりは音を楽しみ、生活を通して思いを示した歌が多い。衣と川は切っても切れない縁なのだろう。

「宜寸川」に寄せて思いを述べるこの歌では、「よし」すなわち「縁（方法）」がないだろうかと思案する。いとしい娘に衣を貸した春日の宜寸川よ。なんとか方法はないものか。あの娘に会いたい。宜寸川は奈良市春日山の水屋峰に発し、東大寺南大門前を過ぎ、奈良女子大学北側で佐保川に合流する吉城川である。穏やかな流れは歴史あるこの地に静かに流れ、人の心を映している。

「きれいですよ」と言われて我に帰った。姿見の中には高島田を結い、黒引きの振袖姿の自分がいる。小さな頃から夢に見た花嫁衣装に、少し誇らしく少し気恥ずかしく頬を染めている姿が映る。そして、晴れやかなうれしい気持ちは七五三のときと変わらない。着物は、女の一生を語るのになくてはならないものだと思う。隣では、川がいつもそのそばにいるように、母が静かに微笑んでいる。姿見のすみにもうひとつの優しい視線を感じて、目を閉じた。